
蜘蛛

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜘蛛

【著者名】

N1046F

【水色ペンキ】

【あらすじ】

大学時代、俺は大きな蜘蛛と同居していた。お互に干渉はせず、少しだけ相手を気にしながら……。

俺はかつて、蜘蛛と同居していたことがある。それもちょっと普通ではない蜘蛛と。

大学入学とともにこの町にやつてきた俺は、安いこと、学校から近いこと、静かに暮らせそうなことを条件に、住みかを探した。学生街の不動産屋に紹介され、何軒かの候補を回ったあとに連れてこられたのが、その蜘蛛の部屋だった。部屋は六畳ひと間の風呂なしで、流しは簡易サイズ、洗濯機スペースなし、クーラーなし、網戸なし、窓は西向き、という、その界限でもかなりランクの低い部屋だった。そして部屋に踏み込んだとき、俺は一方の壁に、差し渡し五十センチはあろうかという巨大なハエ取り蜘蛛が一匹、足をすばり張りついているのを発見したのだ。

「ちょっと環境は悪いんですけど、家賃は一万五千円、共益費なし、大家さんは別宅で、電話もテレビのアンテナも通っています。敷二、礼ゼロです。ブレーカーも三十アンペアですし、お風呂がないことを除けば、まあ値段相応つてところですね」

営業員がいう。俺は無論そんなことより、壁にいる蜘蛛のことが気になつた。

「えーと、そこの、やたらとでかい蜘蛛は何ですか？」

「蜘蛛？」

「そこなの、それです」

俺は蜘蛛のほうを手で示したが、指をさすのはためらつた。指をさせば、何かこちらの意図を誤解した蜘蛛が、やにわに飛びかかるかもしないという不安を覚えたからだ。

「ああ、蜘蛛ですか。まあこういつてはなんですけど、ビコのアパートにも虫はいますよ。普段は人の目につかないところに隠れてますけど、たまにこうして出てくるんです。気にしなければどうとうことはありません。ダニやゴキブリなら駆除したほうがいいかも

されませんが、蜘蛛はまあ……。駆除の仕方はござ存じです？」

「ええ、まあ。そういう虫なら」

営業員による蜘蛛へのコメントはそれだけだつた。土地が変わればこんなに大きい蜘蛛がいるものなのか。蜘蛛は自分が話題にされたことにも気づかず、やはり壁にくつついでじつとしたままだ。

「どうなさいます？ 次のところ、見に行きましょうか」

「あー、ちょっと待つて下さいね。すみません」

その時、俺はふとこんなふうに考えた。こんな蜘蛛が安心して暮らしているなら、ここはそれなりに落ちついたところに違いない。値段も安いし、自転車を買えば大学までの時間もそれほどではなかつた。蜘蛛がもし人間に害をなす生きものなら、営業員がそう言わないはずはないし、実際ハ工取り蜘蛛に噛まれたという話はあまり聞かない。

「じゃあ、ここでお願ひします」

こうして俺の大学時代の住みかが決まった。

蜘蛛はどこにも行かなかつた。見たところ蜘蛛が通れそうな壁や天井の破れなどはないから、留守中にいなくなることがないのは当然だつたが、窓を開けないわけではないし、むしろ部屋にいるときは春先からほとんど窓を開け放しといつてもよかつたのだが、別にそこから外に出ていくというわけでもなく、とにかく蜘蛛は、部屋の中に留まつた。何を食べて生きているのかは知らない。いや、ハ工取り蜘蛛というのだから当然小さな虫などを食べているに決まつていてるのだが、あの大きな体を蠅や蚊のようなもので養えるとは思えないし、とにかく、どうやって活力を得ているのかは、ついぞ分からずじまいだつた。あるいは大食漢を想像する俺の考えが間違いで、極々たまに何かを捕食すればそれでよく、実際ほとんどの時間はじつとしているのだから、それで十分に暮らしていくのかもしけなかつた。

蜘蛛は太陽の光を嫌つた。部屋は西向きだつたから夕方まで直射

日光を浴びることはなかつたが、窓からの日差しが強くなりだすと、それまでじつとしていた蜘蛛は、光の縁辺を避けるようにじりじりと日陰へ回りこんでいった。そしてまた動かなくなるのだ。

夜眠るときの蜘蛛の位置が、朝になつても変わつていないことがよくあつた。外出から帰つたときもそつた。まつたく動いていないのか、その位置がホームベースのようになつていて、どこかへ動き回つたあげくに同じところへ戻つてきたのかも、俺には全然わからなかつた。ただ蜘蛛が好んで留まる場所はいくつかあつて、蜘蛛を観察して三ヶ月目くらいから、俺は大体その場所を把握できるようになつた。そしてさらに観察していると、ちょっと面白いことがわかつた。蜘蛛が好んで留まる位置は、毎日少しずつ移動しているのだ。それはまるで天球儀のうえを星座が動くように、相互に一定の間隔と角度をもつて、直方体をなす壁、天井、床のうえに投影されているように見えた。それは約一年をかけて一回転し、巧みに窓の場所を避けていた。あるいは星辰のように、太陽の位置に規定される何かだつたのかもしれない。

あるとき大学の友人が俺の部屋にやつってきた。彼は部屋に入るなり、開口一番こういった。

「おまえつて結構キレイにしてるのな。男の部屋なんてゴタゴタしてなんぼだつちゅうのに、逆にちよつと気持ち悪いわ」

「高校まではぐつちゃぐちゃにしてたけどな。なんかここ来てから、きちんとしないと気が済まなくなつたんだよな」

「なんでもまた？」「わかんね」

そんな話をしていると、普段あまり動かない蜘蛛が、さつと身を翻して三、四歩壁のうえを後じさつた。頭をこちらに向けて、警戒するように動いたのだ。俺はこの挙動に少し驚いた。友人はそこで初めて、この大きな同居人に気がついたようだつた。

「うわ、おまえこれ何。キモツ。生きてんのか？ これ」

「生きてるよ。ハエ取り蜘蛛」

「うわ、うわ、やばいんじゃねえのこれ。でつけー」

「ハエ取り蜘蛛は大丈夫だろ。俺がここに来たときから、ずっと部屋にいるんだよ」

「つてお前さあ、いくらハエ取りがおとなしいツツツても、こんだけデカイとやっぱ危険なんじゃねーの?」

「別に今まで危ない目にはあつてないしなあ。それに、お互いまり干渉しないし」

「お互いつて、コイツの考へることが分かるのかよ」

「わからないけどさ。でも、触つたこととか一回もないぜ」

「おまえヤバイってこれ、絶対ヤバイ」

「そうかなあ」

それから友人はちらちらと蜘蛛のほうを見た。蜘蛛は蜘蛛でいつたん動いた位置が気に入つたのか、そこから再度動くということはなかつた。ただ一度、友人が持ってきた焼酎をあけたときに、蜘蛛が体全体を僅かに震わせたのに俺は気づいた。普段部屋ではビールくらいしか飲まなかつたから、強いアルコールの匂いなどにはこういう反応を示すのかもしぬなかつた。

友人は酔えないようで、二十一時を回る頃には帰つていつた。門前まで送つて部屋に戻ると、蜘蛛は友人が来る前の位置まで戻つていた。

一度だけ、蜘蛛が激しく飛び跳ねたことがある。いや、飛び跳ねたという表現が適切か、ちょっと俺には分からぬ。そのとき蜘蛛は天井に張り付いていて、俺は夕飯の支度をしていた。炊飯器が温まってコポコポコポと音をたて、上の通気孔から湯気が立ちのぼり始めたとき、急に蜘蛛が天井から落つこちて、炊飯器の蓋にぶち当たつたのだ。炊飯器はひっくり返りこそしなかつたものの、止まる寸前のコマみたいに数秒間ぐわらり、ぐわらりと回転し、電気コードに引っ張られてその動きを止めた。蜘蛛は畳の上でひっくり返つ

たあと、足を瞬間的に痙攣させるような動きをして、弾けるように起き上がった。そして脱兎のように壁に向かつて走ると、低い位置にあるお気に入りスポットまでいって、そこで振り返った。俺は蜘蛛が火傷でもしていいかと心配になつたが、外骨格生物の手当の方法など知らないし、また蜘蛛が興奮しているかもしぬなかつたので、しばらく様子をみるとこととした。結局蜘蛛はそのあと何もなかつたように普段どおりの生活に戻つて、一瞬見せたあの行動がなんだつたのか、ついに俺にはわからずじまいだった。

大学三年の夏のことだ。その蜘蛛が死んだ。ある日突然壁に登らなくなつて、部屋の片隅に背を向けて、じつとうずくまつているようになつた。翌日見ると、それまで脚の先端を突いて立つて（坐つて？）いた蜘蛛が、第一関節から先をしななりと畳につけて、関節でもつて畳に立つようになつた。それは裾を引きずつて歩く、平安時代の女性を連想させた。その翌日、蜘蛛は腹だけで坐つていた。脚はもうそえであるだけだつた。そしてさらにその翌日、蜘蛛は腹を上にしてひっくり返つていた。死んだのだ。

立つほどの力もなくなつていた蜘蛛が、どうして死に際にひっくり返つたのか、そのとき俺にはわからなかつた。死んだとの筋肉の収縮の関係で、蜘蛛の意志とは関係なく、いわば化学的なエネルギーでもつて、そういう動きをするのもしれないと思つた。死んだ蜘蛛は動かないという点で普段の蜘蛛とあまり変わらなかつたが、心なしか体の表面が乾燥しかかつているように見えた。

どうしよう。生ゴミとして死体を処分すべきだらうか。あるいはアパートの前庭にでも穴を掘つて、埋めてやるべきだらうか。俺はしばらく考えた。そして結局、そのどちらも思い直した。

新聞を見ると、向こう数日は晴天が続くようだ。俺は蜘蛛の背に両手をあてがい、そつと死骸を持ち上げた。重いような軽いような、一リットルのペットボトルくらいの重さだつた。ブラシのように強い毛が、掌に「わざわざ」と当たつた。

俺は死骸を持つて廊下に出た。アパートは二階建てだが、屋上には誰も使わない物干し場がある。誰も使わないというのは、皆ヨイソランドリーで乾燥までやつてしまつことが多いからだ。俺は屋上に出ると、その片隅に蜘蛛を置いた。脚を下に置こうとすると、蜘蛛は後転するようにひっくり返った。重心の問題だったのだ。仕方なく腹を上にしたまま蜘蛛をそこに残し、俺は部屋に戻った。

翌日見に行くと、蜘蛛の死骸は鳥につつかれて、すでに半分バラバラになっていた。近くまで行くのが忍びなく、俺は屋上の入り口からそれを見ることどめた。

さらに翌日見に行くと、蜘蛛の死骸は皮と脚の一部を残して、ほとんどのなくなっていた。

さらに翌日見に行くと、蜘蛛の死骸はきれいさっぱりなくなっていた。

俺と蜘蛛との関係は、このときをもって終了した。あの蜘蛛がなんだつたのか、俺にはいまだに分からない。ほかにあのよつね蜘蛛を見たことはないし、こるという話も聞いたことがない。自分の妄想かとも思ったが、不動産屋の営業員も、部屋を尋ねてきた友人も、あの蜘蛛を見ている。だからやつぱりいたのだろう。

この話をすると、たいがいの人は気持ちが悪い話だという。だが俺に言わせれば、それは全くの的外れだ。確かに蜘蛛との暮らしには困難もあった。でもその困難とは結局のところ、相手の考えが分からぬ不安、かりそめの安定が突然闘争へ変わる可能性への不安、そういうつたものにすぎなかつた。それはありふれた不安にすぎない。適度な関心と適度な無関心、ひとつは、いや、ひとに限らず、そういう不安定なものに寄りかかって生きていいくしかないのだ。

そして、そのついで敢えていう。俺はやはりあの蜘蛛を愛していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1046f/>

蜘蛛

2010年10月8日15時44分発行